

子どもの身体表現活動の支援方法

—生活発表会を中心とした連続性のある活動の分析—

辰 巳 裕 子

はじめに

幼稚園教育要領第2章(表1)のねらいと内容にある「表現」とは、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とある。また、保育所保育指針の感性と表現に関する領域「表現」では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とある。

表現活動は歌唱や合奏、絵画制作や工作・粘土、劇遊びや模倣遊び、ダンスやリズム遊び等、時にはそれらを組み合わせ活動している。身体における表現活動が他の活動と異なる点は、絵画制作や廃材制作・粘制作物等が形として子ども遊びや活動を通じて表現したものが一つの作品として残ることに対し、身体表現は目に見える形としては残ることは殆どない。保育者の留意点として保育者は心を動かす出来事などに出会い、感動を他の幼児や保育者と共有し、様々に表現する場面を見逃さないことや、一人一人の表現を見逃さず受容することが大切である。また子どもたちが表現しようとする意欲を受け止めて、子どもたちが生活の中で様々な表現を楽しむことができるような環境を作り、表現をする過程を大切に自己表現が楽しめる様に保育者は工夫する必要があることが述べられている。

園で実施されている表現に関する園行事として

は、運動会、生活発表会、絵画展、音楽会等がある。運動会や生活発表会でお遊戯等の身体表現が実施されるのは、子どもらの普段の遊びや身体表現活動を発表するための時間と場所の設定が必要であることが考えられる。

樋口は、望ましいお遊戯会のあり方として、「お遊戯会は、これまでの生活発表として、子ども達の成長した姿をありのままに示すことができるよう、催されるべき性質のものだと思う。そして子どもと両親と保育者がいっしょにその成長を喜び合い、楽しく過ごせる日でありたい。」と述べる(樋口1961:18)。これは、子どもたちの日々の体験と表現の連続性からできた表現の場所の一つが生活発表会であると言えよう。また、幼児期のこれらの身体表現の体験は、小学校教育で実践させる体育の表現活動の基盤づくりとも考えられる。

小学校から高等学校までの「表現運動系およびダンス領域」の発達に応じた内容構成(表2)では、小学校低学年の教育指導要領に、領域名称「表現リズム遊び」の内容ア「表現遊び」イ「リズム遊び」における活動が実践され、高校生では領域名称「ダンス」内容ア「創作ダンス」イ「フォークダンス」ウ「現代的なリズムのダンス」と続く。浜口は、幼児期から学童期、青年期への人間の発達を、教育にあたるものが自己の眼前の子どもだけでなく、長期的な視野でみることの重要性が指摘しており、幼児期に関わる保育者も同様であると考えられる。

幼稚園教育要綱第3章1では「(1)教育課程に基づく活動を考慮し、幼児期にふさわしい無理のないものとなるようにすること。その際、教育課程に基づく活動を担当する教師と緊密な連携を図るようにすること。」と述べられている。しかし、長期的

表1 幼稚園教育要領 第2章 ねらいと内容

表現	
感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。	
1	ねらい
	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
	(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
	(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
2	内容
	(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
	(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
	(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
	(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
	(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
	(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
	(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
	(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。
3	内容の取扱い
	上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。
	(1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。
	(2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
	(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

表2 表現運動及びダンス領域の内容構成

学年	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校・高等学校
領域名称	表現リズム遊び	表現運動	表現運動	ダンス
内容	ア 表現遊び イ リズム遊び (リズム遊びに簡単なフォークダンスを含む)	ア 表現 イ リズムダンス (フォークダンス)	ア 表現 イ フォークダンス (リズムダンス)	ア 創作ダンス イ フォークダンス ウ 時代的なリズムのダンス (中学校はその他のダンス、高校は社交ダンス等のその他のダンスも履修させることができる)

学校体育実技指導資料第9集「表現運動系及びダンス指導の手引」より引用

表3 第3章 指導計画作成上の留意事項

幼稚園教育は、幼児が自ら意欲をもって環境とかかわることによりつくり出される具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである。幼稚園においてはこのことを踏まえ、幼児期にふさわしい生活が展開され適切な指導が行われるよう、次の事項に留意して調和のとれた組織的、発展的な指導計画を作成しなければならない。

1 一般的な留意事項

- (1) 指導計画は、幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し必要な体験を得られるようにするために、具体的に作成すること。
- (2) 指導計画作成に当たっては、次に示すところにより、具体的なねらい及び内容を明確に設定し、適切な環境を構成することなどにより活動が選択・展開されるようにすること。

具体的なねらい及び内容は、幼稚園生活における幼児の発達の過程を見通し、幼児の生活の連続性、季節の変化などを考慮して、幼児の興味や関心、発達の実情などに応じて設定すること。

環境は具体的なねらいを達成するために適切なものとなるように構成し、幼児が自らその環境にかかわることにより様々な活動を展開しつつ必要な体験を得られるようにすること。その際、幼児の生活する姿や発想を大切に、常にその環境が適切なものとなるようにすること。

幼児の行う具体的な活動は、生活の流れの中で様々に変化するものであることに留意し、幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう必要な援助をすること。

- (3) 幼児の生活は、入園当初の一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ安定していく時期から、やがて友達同士で目的をもって幼稚園生活を展開し深めていく時期などに至るまでの過程を様々に経ながら広げられていくものであることを考慮し、活動がそれぞれの時期にふさわしく展開されるようにすること。
- (4) 幼児の行う活動は、個人、グループ、学級全体などで多様に展開されるものであるが、いずれの場合にも、一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させるよう適切な援助を行うようにすること。
- (5) 幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分図るなど、幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにすること。
- (6) 長期的に発達を見通した年、期、月などにわたる指導計画や、これとの関連を保ちながらより具体的な幼児の生活に即した週、日などの指導計画を作成し、適切な指導が行われるようにすること。特に、週、日などの指導計画については、幼児の生活のリズムに配慮し、幼児の意識や興味の連続性のある活動が相互に関連して幼稚園生活の自然な流れの中に組み込まれるようにすること。
- (7) 幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての反省や評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図ること。

2 特に留意する事項

- (1) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、幼児の自立心を育て、他の幼児とかかわりながら活動を展開する中で生活に必要な習慣を身に付けるよう援助すること。
- (2) 道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児とかかわりの中で他人の存在に気付き相手を尊重する気持ちで行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。
- (3) 思考力の芽生えを培うに当たっては、遊びを通して気付いたり試したりする直接的な体験の中で知的好奇心を育て、次第によく見よく聞きよく考える意欲や態度を身に付けるようにすること。
- (4) 安全に関する指導に当たっては、情緒の安定を図り、遊びを通して状況に応じて機敏に自分の体を動かすことができるようにするとともに、危険な場所や事物などが分かり安全についての理解を深めるようにすること。また、交通安全の習慣を身に付けるようにするとともに、災害時に適切な行動がとれるようにするための訓練なども行うようにすること。
- (5) 心身に障害のある幼児の指導に当たっては、家庭及び専門機関との連携を図りながら、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促すとともに、障害の種類、程度に応じて適切に配慮すること。
- (6) 行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然な流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し適切なものを精選し幼児の負担にならないようにすること。

な視野で指導する為の発達の連続性を考慮した教育課程に基づく保育者の支援の先行研究は殆どない。

そこで本研究では、子どもたちの身体表現の連続性からできた生活発表会までの保育者の支援に着目し、関連する研究成果を取り上げ、支援の方法とその意義について述べる。そして、幼児教育と小学校教育のつながりを視野に入れた保育者の支援について調査分析することを試みた。

なお、本研究では生活発表をする場合は、運動会・生活発表会・絵画展・音楽会など、各園によってその行事の在り方や名称は異なるため、生活発表会・クリスマス会・お遊戯会等内で行われる、お遊戯(ダンス・身体表現)を統括して生活発表会とする。

研究方法

本研究では、小学校教育と幼稚園教諭として経験のある保育者(教員)に着目し、幼児期に大切にしている保育者の身体表現の支援方法から小学校低学年の領域名称「表現リズム遊び」の内容A「表現遊び」における活動の連続性と実践方法について、具体的な方法も含め分析する。

2021年10月に小学校および幼稚園(保育園)にて教諭経験のある2名および幼稚園教諭2名に事前にプレインタビュー調査を行う。2021年11月に幼稚園・小学校教諭経験教諭1名(幼稚園8年小学校5年)、幼稚園教諭1名(幼稚園2か所24年)、身体表現指導者1名(幼児・小学生指導経験8年)の3名でこれまでに作成した資料や写真等を閲覧し振り返りながらグループインタビュー調査を行い保育者としての支援の具体的方法や大切にしているものを出し合った。

倫理的配慮としては、インタビュー調査時に研究の目的と使用方法、子どもおよび指導者の個人名および実践園が特定されないよう配慮することを説明し、同意を得た。

グループインタビュー調査した内容は、文献および先行研究を参考にカテゴライズし、各項目に対する身体表現の支援について分析を行った。

結果および考察

幼稚園・保育園・こども園の生活発表会の時期は、概ね11月～12月に開催される園が多い。発表される場合は、子どもたちが生活する園内や大きなホールを借り大舞台等で開催される。園内で実施される生活発表会は、衣装・舞台・舞台照明・集客数等、子どもたちが発表する環境は各園により舞台の有無も含め多種多様で、子どもたちは何らかの準備をして日頃の身体表現活動の成果を発表する場となるのが、生活発表会である。

本研究では生活発表会で披露するお遊戯(ダンス・身体表現)作品が出来上がる過程に着目し、こどもの身体表現を引き出す保育者の支援の在り方について、文献・先行研究およびグループインタビューをもとに以下にカテゴライズした。なお、インタビュー内での言語要約は□で表記する。

1.『決められた動き(振付)』

1-1 「保育者や園の方針で決められた演目を踊る」

生活発表会は、保護者にとって日頃の活動の集大成として子どもたちの姿がみられる一つの行事である。生活発表会の位置づけは、幼稚園(保育園)により異なっており、その園の教育理念や方針も公開される場ともいえる。

教育理念によるなどに身体表現を交え発表することや、幼稚園(保育園)等によっては、各年齢や学年によっては例年決められた演目が存在する場合もある。園行事の演目について佐藤は、「生活発表会や運動会における幼稚園(保育園)等のねらいや目的に準じて開催されるからである。例えば、来年度の入園予定者のことを視野に入れ、運動会を保育公開の場とせざるを得ない場合や、日常とは切り離し「ハレの日」だからこと体験できることの意味を追求していくこともひとつであろう(佐藤 2006: 29)」と述べている。

実践現場では、「毎年決められた演目をおにちゃんやおねえちゃんが練習し披露すると、年中や年少児は憧れを持つ。「自分もあんな風に踊ってみたい。早く大きくなってかっこよくなりたい」と、年上になるということを意識し練習に励みだす。園では、生活発表会が近づくと練習時間がおおよそ決

められており、本番が近くなるとステージを使用する時間も決められ各クラスに分かれ練習を行う。保育者は、演目の内容や意味合いを子どもたちに伝え、振り付け指導を行う。その際に注意するのは、こども達が楽しく踊れることに配慮することだ」と述べる。

「保護者の感想では、「あ～もうこんなに大きくなったんだ」と演目を踊りきった我が子の成長や卒園が近づくことを感じているようだ」とあった。

1-2 「保育者が選んだ何曲かの音楽から子どもらと選曲し保育者が振付する」

生活発表会の時期が近づくにつれ、実践現場では「子どもたちから「先生今年は何踊るん?」「そろそろやけん、練習せないかんのと違うん?」と楽しみに質問してくる子どももいる。保育者は、予め何曲か選択した音楽をこども達と共に聞き、どの曲で踊りたいか話し合い決定する。何曲か選ぶ中には、流行りの音楽もあれば年齢に応じた既存の素材（振付あり音源）からの楽曲もある。保育者は、子ども向けの映画や振付テレビ番組から選曲し、子どもが踊りやすいテンポやリズムで馴染みのある楽曲を選曲し準備する。また、選曲の中には流行りの音楽を取り入れる園もある。A園では「ゆうぎの曲では、お互いのクラスのプログラムから刺激を受けあえるように、いろいろなジャンルの曲を選んだ（年少児）」「ゆうぎでは様々なジャンルの曲の中から各クラスで合う曲を選んだ（年中児）」と各年齢と目的に応じて選曲していた。

保育者によっては、身体表現が得意な人や不得意な人もいる。また、保育士養成校での身体表現を学ぶ講義内容もフォークダンスから創作ダンスまで幅広い（辰巳 2017：234）。日々多忙な保育者が、振り付けや構成を考えることは容易ではなく、インターネットの保育者振付動画を参考にして取り入れることもある。筆者が先行研究で行った調査でも、現場の保育者が身体表現における講習会で学びたいことは、「発表会・運動会で使える踊りと音楽」や「ダンスの構成・演出方法」のニーズが高く、すぐに実践導入できる「実践技法」を学びたいという希望が多い。以前よりカセットやCDにセットとして振り付けが書かれている舞踊譜があり、保育者はそ

れらを読み取って子どもらに指導していた。現在のDVDや動画配信の活用は時代の流れに沿った手法であるといえよう。

『決められた動き（振付）』は、「保育者がかっこよく踊っていれば子どもらはかっこいい～！素敵！と真似をしたくなり、保育者が楽しく大きく踊って入れば、楽しそう！踊ってみたい！と参加したくなる。いきいきと踊る保育者がいると、気が付けば子どもらは保育者の周りに集まり自然に体を動かし、真似をする場面がある」と述べる。

『決められた動き（振付）』で留意点は、子ども達が練習に自ら楽しく参加できる環境だと考える。しかし、実践現場では「例年のことなので本番が近づくにつれ、踊りを揃えることや大きく踊ることなど、保育者が出来栄を気にしながら指導してしまう。ステージでの練習時間の配分は決められており限られた時間での練習は、時に保育者が声を張り上げて指導する場面もあり、実際に上司からも仕上がりについて指導されることもある」とも述べていた。古市は「舞台等での発表を子どもに良しとしない考えには緊張によるふりの硬化と大人の見栄が問題になるあらであらう。それは出来上がりの良し悪しを問題にする教育の結果であって、本来の身体表現では表現していく過程の心の動きを大切にする保育者の態度によってこれを防ぐことが可能である（古市 1995：12）。」と述べている。

2. 『子どもと保育者で作る動き（振付）』

2-1 「子どもらと共に動き創作する」

実践現場では、保育者が今年はこの曲（子ども達と選曲することも、子どもがこれで踊りたいと持参することもある）と音楽を流すと、子ども達は音楽を感じ、体を動かし、自由な身体表現活動がはじまる。鈴木は、保育計画に沿って身体表現を実施した言葉掛けの保育者のキーワードとして「どんなふうにするの」「どんな動きをするの」「どうなふうになったの」「どんな形なの」「どうなっちゃうの」など、それぞれの場面に応じて声をかけ、子ども達の表現を促すことばを抽出する（鈴木 2015：44-5）。実践現場も同様に、「音楽や保育計画に基づきイメージをしたうえで身体表現活動を行い、保育者は子ども達の動きをみて、それらを発展させ、それを

振り付けとして踊りにつなげる場合もある。また、振り付けを保育者がつくり、一コマを子ども達がそれぞれのグループや個々に踊るシーンを入れることもある」という。

田辺らは「自分で創造的な表現を考える」「自分なりの表現ができる」「友達から友達へ表現が広がる」「表現することで友達との関りが増える」と保育実践において重要視をしている内容を第1因子として「この発達と友達関係の深まり」として分析し、「子どもの身体表現はこの発達が集団（保育現場では友達）に影響を与え、同時に集団（友達）の作用が子に影響するということである（田辺ら 2012：271-5）。」と述べる。樋口は「このような経験が子ども達の生活発表会に楽しい遊びとしていかに再現するかは、保育者の努力によるもので、保育者の重要な仕事の一つである（樋口 1962：39）。」と述べる。子ども達が、互いの身体表現を見て意見を出し合いさらに発展していく過程は、中学校教育での創作ダンスの過程と同様であり根幹であると考えられる。

『子どもと保育者で作る動き（振付）』での留意するところとして、[保育計画を保育者自身が意識し、子ども達が自由な発想で身体表現を行っているにも関わらず、保育計画に沿って保育者自身が言葉掛けをしてしまうことがあった]と述べる。例えば、実践内容が決定している研究発表会や発表会の時には、[実践する際、自らが思い描いていた保育計画の目標と結果に近づけようとする場面である。[保育実践の結果と出来栄を意識しすぎていた。]と振り返るが、発表会の目的や方針に沿った実践でもあったと考える。

3. 『子ども達が作り出した動き（振付）』

「子ども達が作り出す動き」

「子ども達は、遊びの中で様々な身体表現活動をする。例えば実践現場で、園庭（年少児）でプリキュアに変身して走って降りてくる。保育者が「○○ちゃんは△△なのね。○○ちゃんは□□なのね。」とそれぞれの役を確認して、どうやって変身するのか？と聞くと子どもは「こうやって変身するのよ」と手をあげて見せる。保護者は「その手でくるっとまわるの？」と、そこでは子どもの発達に応じた言

葉掛けで動きを発展することも大切にしている」と述べる。

「保育者が準備した環境」

保育計画にそって絵本を子ども達の前で読み、保育者は、子ども達が興味や関心が湧くであろうと予測し教材をすでに園内に準備し環境を整えておくが「保育者から声を掛けることはしない。「先生見て！」と表情を輝かせて呼びに来た時には、自分が見つけて発見した満足感と自信が表出している」。[発表会に向け“練習”は、子ども達が遊びの中で踊りやセリフを作り、おもしろい音や動きを発見し表現する遊びだ。年長児にもなると、自分たちが作った衣装や小道具の場所まで考えて遊びだす]と述べる。樋口は、「手をたたいて一二三、次に右足のかかとを前にトン……」と教えこませるよりも、幼児自身の表現のありのまま発表するほうがどんなにか楽しいものになるであろう（樋口 1962：41）と述べる。子ども達が作った作品を生活発表会で実践した場合の出来栄えについて「子ども達で作っている作品だから、もちろん踊りが変わることもあるし、突然セリフが入ることも。それが子ども達の本番であり、見ていて毎回違うので楽しい。できることならばその時、その場所に保護者を呼び見てもらいたい。友達同士、互いに得意なことも不得意なことも知っている。時にストレートに相手に伝えるが悪口ではなく凸凹がしっかりととはまり遊んでいる。毎月のおたよりと帰りの会での日々の出来事を保護者に説明することで、保護者も発表会を楽しみ来て、笑顔で満足してくれている。」と述べる。生活発表会が準備された舞台という限られた場所でなく、子ども達が活動を行う場所で子ども達が作る作品が「完成した！」と思うその時期に発表会を行えるのが理想であり子ども達自身も生き生きと表現できるのではないかと考える。

4. 『小学校への身体表現活動の連続性』

「表現運動系およびダンス指導の手引き」に表現遊び〈小学校第1学年及び第2学年〉「表現遊びでは、身近な題材の特徴をとらえ全身で踊ること（文部科学省 2013：12）。」と技能の内容がある。[実践現場では、小学校教育での発達の段階に応じた内容

構成として、低学年の「表現リズム遊び」では、「表現遊び」と「リズム遊び」を組み合わせた遊びの体験を通して、即興的な身体表現能力やリズムに乗って踊る能力、コミュニケーション能力などを培えるようにすることが大切である。〕〔表現遊びでは身近な題材の特徴をとらえ全身で踊ること。低学年の段階から簡単な変化とメリハリをつけて、表現系ダンスの動きの面白さを体験し、身に着けることができるようにすることを大切に指導している〕と述べる。では、幼児期において身体表現活動を行う上で、小学校教員の立場から見て身につけて欲しいものでは「子ども達は環境さえ整えておく」と身体表現遊びをする。その環境の作り方がとても大切で子ども達が何に今興味を持っているのか必ず毎日一人ひとり振り返り記録する。保育計画を前日に書くことも、変更することもある。〕またプレインタビューは「とにかく遊ぶことが大切」や「いろいろな経験をしてほしい。経験がないから体が硬く解きほぐすのに時間を要する児童がいる」とあった。人前で表現することを恥ずかしがる児童に対しては、「遊びを通じて少しずつ表現系の動きに繋がっているため最初は恥ずかしそうにしているでも少しずつ引き出していくので問題はない。ただ、幼児期にとにかく遊んでくれていることが大切」と述べる。浜口は、「幼児期から学童期、青年期への人間の発達を、教育にあたるものが自己の眼前の子どもだけでなく、長期的な視野でみることの重要性を指摘し、殆どの保育者が小学校での身体表現活動を保育者として授業を見ることもなく、入学前の幼少連絡会のみ的小学校教師との出会いや交流があるのみで、「同じ地域の子どもを預かる者としての連携や協力は十分とは言えない状態にある（浜口 2007）。」と述べている。今後は、小学校での身体表現遊びを分析し幼児期の遊びの経験がどのように、学童期へとつながっていくのか具体的な表現活動の連続性についても調査する必要があると考える。

おわりに

本研究では、生活発表会を中心とした身体表現活動についてグループインタビュー調査の内容を分類し子どもの身体表現における保育者の支援について

分析を行った。塩崎の調査で、「身体表現遊びを設定保育として行う頻度について」の質問では「あまりやっていない」が51%で最も高い結果であった。理由は「時間がなくてできない、苦手、進め方が難しい、行事で行っている」等が述べられている。「身体表現遊びについて一番近いものについて」の質問では「子どもたちの新たな一面が見られる」とほぼ同じく「指導の流れを組み立てるのが難しい（塩崎 2019）。」とある。また、鈴木は「一回性の強い子どもらの身体表現という活動では方法論が体系化されにくく、指導内容や方法は保育者自身の裁量に委ねられる部分が多い。それが本活動の醍醐味でもあるが、苦手意識をもち敬遠する保育者が多い要因にもなっている（鈴木 2015：43）。」と述べる。本調査を通じて、身体表現遊びは子どもの興味をその時から活動は始まり、保育者の言葉掛けも含めた環境設定の重要性もわかった。はじめに述べたように身体表現活動はイメージが思いついたその時、その一瞬に身体で表出する。遊びや活動は流動的で、突発的に創作され時には作品として仕上がっていく。その為、保育計画に沿って進行するとは限らず、設定保育としては難しいととらえ、時に結果を意識し計画に近づけようとする場面もでてくるとも確認された。

森上は「これからの保育者に求められるものは、どのような“出来事”に出会っても、それを創造的に生かすことができるように、心とからだが開かれていて「意図」や「計画」や「予測」という呪縛から解かれる（森上 2004：2）」と述べる。調査内であったように、日々の子どもの活動を振り返り、環境を整えていくことは保育者の努力であり子どもらの表現の幅は遊びとしてさらに広がり展開をみせ、教育課程の基盤づくりになると考える。今後は、身体表現遊びの個々の興味に応じた具体的な実践方法を調査し、保育者が苦手とせず取り組めるような分析を行いたいと考える。

本調査のご協力をいただいた皆様、本当にありがとうございました。

文 献

- 1) 塩崎みづほ：身体表現遊びの指導ノートを活用

- した指導法の授業の成果, 秋草学園短期大学紀要 36号, pp91-102 (2019)
- 2) 古市久子: 幼児の身体表現活動における諸側面についての一考察, エデュケア1995第16号, pp19-25 (1995)
- 3) 厚生労働省: 保育所保育指針解説, フレーベル館 (2017)
- 4) 佐藤寛子: 日常の中の運動会, 幼児の教育, (2006, pp29)
- 5) 森上史郎: 「カンファレンスによって保育を開く」, 発達 (68), ミネルヴァ書房, pp2 (2004)
- 6) 辰巳裕子: 香川短期大学紀要第45巻, 香川短期大学, pp229-240 (2017)
- 7) 田辺昌吾, 江原千恵, 内藤真希, 古市久子, 遠藤晶, 松山由美子: 身体表現の指導の現状に関する研究－保育者が指導する上で重要視している内容について－, 四天王寺大学紀要第54号, pp271-279 (2012)
- 8) 内閣府: 幼稚園教育要領, フレーベル館 (2017)
- 9) 樋口三紀子: お遊戯会のあり方－幼児の実態からみて考えられるもの－, 幼児の教育, pp16-20 (1961)
- 10) 樋口三紀子: お遊戯会の在り方, 幼児の教育, pp16-20 (1961)
- 11) 樋口三紀子: お遊戯会の在り方 (二) －幼児の実態から考えられるもの－, 幼児の教育, pp37-42 (1962),
- 12) 浜口順子: 事例で学ぶ保育内容領域表現, 萌文諸書林, pp197 (2007)
- 文部科学省: 表現運動系及びダンス指導の手引き, 学校体育実技指導資料第9章, (2013)
- 13) 文部科学省: 幼稚園教育要領, 第3章指導計画作成上の留意事項, (1989年),
- 14) 鈴木裕子: 幼児期における自由で創造的な身体表現活動における題材の検討, 愛知教育大学幼児教育研究第18号, pp43-53 (2015)
- 15) 株式会社ラグインターナショナルミュージック: 【幼児・低学年】子ども向けのダンス曲簡単に踊れるキッズダンス, <https://kids.studiorag.com/kids-dance-music>, (2021年11月20日)
- 16) PETIPA: 幼稚園・保育園の先生を対象にした講演・セミナー, <https://petipa-hoikukensyuu.com/> (2021年11月20日)